

## 人間学と文学

——18 世紀ドイツの場合——

廣 川 智 貴

本発表の目的は、18 世紀後半のドイツにみられる人間学と、その文学への影響を紹介することである。ここでは、エルンスト・プラトナーを当時の人間学の典型例として、フリードリヒ・フォン・ブランケンブルクの『小説試論』（1774）、ヨハン・ヤーコプ・エンゲルの『行為、語り、対話について』（1774）を人間学的な文学理論の例として、そしてゲーテの『若きヴェルテルの悩み』（1774）を人間学の詩学をふまえた小説として検討する。

16 世紀に至るまで、人間学という概念は神学的な意味を含んでいたが、それ以降は人間の精神と身体に関する理論を指すようになった。プラトナーの『医師と哲学者のための人間学』（以下『人間学』）もこうした伝統に連なっている。18 世紀の人間学といえば、カントの『実用的見地における人間学』が想起されよう。しかし、当時の文学者に大きな影響を与えたのは、じつはプラトナーであった。彼によると、人間学とは「身体と精神をその相互作用、制限、関係のうちに一緒に考察する」ものである。もちろん、心身の問題を考察したのはプラトナーが最初ではない。彼の独自性は、医学を採用してこの伝統的な問題を解明しようとした点にある。ドイツ文学にとり重要なのは、『人間学』がきっかけとなり、人間の内面の物語、衝動や感情、病や夢などといった現象が、作品のなかで心理学的に正確に展開されるようになったことである。

こうした人間学の影響は文学理論にもみてとれる。その一例がブランケン

ブルクの『小説試論』である。これはおよそ500頁にもおよぶ体系的な小説理論であり、ドイツ後期啓蒙主義の小説を理解するうえで欠くことのできないものである。小説に関していえば、当時のドイツはまさに後進国であった。ブランケンブルクは、この書を執筆することで、こうした状況を打破しようとする。つまり、彼は小説の特性を明らかにし、軽視されてきたこのジャンルを高く評価しようとするのである。

『小説試論』の特徴は歴史的に小説を規定した点にある。ブランケンブルクによれば、小説が過小評価されるのは、その評価基準が叙事詩にもとづいているからである。つまり小説は叙事詩の亜流であった。だが、ブランケンブルクはこう考える。すなわち、叙事詩が成立するにはそれに相応する歴史的背景があったように、小説にもそうした背景があるはずだと。こうしてブランケンブルクは、歴史的な観点から、小説を叙事詩から解放しようとするのである。

それでは、新しいジャンルとしての小説は何を描くべきなのか。ブランケンブルクは叙事詩と小説を比較してこう言う。「英雄叙事詩が公の行為や事件、すなわち市民の振舞を[……]歌っているとすれば、小説は人間の行為や感情に取り組むものなのである」。もちろん、人間の内面の描写を並べさえすれば小説になる、というわけではない。小説はそうした「人間の行為や感情」を「因果の連鎖」で支えなければならないのである。プラトナーにより、文学には心理を論理的に表現する可能性が開かれたが、これは『小説試論』にもあてはまると言えよう。

こうしたブランケンブルクの書物とならぶのが、エンゲルの『行為、語り、対話について』である。これは80頁からなる小論文にすぎない。とはいえ、この論文も当時の小説理論を知るうえで不可欠な資料である。今日、エンゲルは忘れられた存在だが、同時代にあってはレッシングとならぶ文芸批評家、劇作家、小説家、教育者として広く知られ、各方面に強い影響力をおよぼしていた。

さて、人間学との関連で重要なのは、エンゲルがこの論文のなかで「行

為」という概念を心理的に解釈し直していることである。こうした斬新な解釈はレッシングの刺激によるところが大きい。すでにレッシングは、文学と絵画との境界を論じた古典的名著『ラオコオン』において、「行為」を時間的に「継起する対象」と規定し、それこそが文学の対象であると主張していた。しかし、エンゲルはレッシングのこうした見解に不満を抱き、こう問わずにはおれない。レッシングの言う「行為」とは、「ただの運動」にすぎないのではないか。だとすれば、そうした行為も物体と同じようなものではないかと。つまり、レッシングによる「行為」の規定では、絵画と文学の境界を定めることができないというのである。それにたいしてエンゲルは、「行為」が生じるのは、なぜ対象が「生成」するのかを視野に入れるときだと言う。それでは「行為」は何によって「生成」するのか。それこそ心理にほかならない。エンゲルは端的に「すべての行為の本来の現場は、考え、感じる心なのである」と言う。このように、エンゲルにとって、「行為」とは心理と密接に関係するものであった。さらにブランケンブルクと同様にエンゲルもまた因果を重視していることに注意する必要がある。

最後にこれまで概観した理論的な考察が小説で実現された例を紹介する。それはゲーテの『若きヴェルテルの悩み』(以下『ヴェルテル』)である。新たな文学理論が人間の内面に目を向けたとすれば、そうした傾向が同時代の作品にあらわれたとしても不思議ではない。ここでは人間学の詩学に即して、主人公ヴェルテルの心理描写に焦点をあてたい。

まず手がかりとなるのはゲーテ自身による解釈である。1777年7月10日、ゲーテはある友人に宛てて、ヴェルテルについてこう記している。「見るがいい、この病気の最後は死なのだ! そのような熱狂の結果が自殺なのだ!」。一般に『ヴェルテル』は恋愛小説として読まれ、ヴェルテルの死の原因も失恋に帰せられることが多い。しかし、小説をよく読むと、ゲーテの解釈を裏づけるような病を抽出することができる。すなわちメランコリーである。

作品の冒頭では、ヴェルテルの「孤独」が強調されている。当時、「孤独」

を求める性質は、メランコリーの症状の一つであるとされた。また、「情緒の不安定」もメランコリーの典型であったが、ヴェルテルもその例外ではない。たとえば、ヴェルテルは自分自身のことを、「苦悩から放恣<sup>ほうし</sup>へ、甘やかな憂愁から破滅的な激情へと移り変わるわが姿」と述べている。ヴェルテルの気持ちは極端から極端へと揺れ動き、彼はそれを制御できないのである。さらに特徴的なのは、ヴェルテルが自殺への衝動に駆られるということである。メランコリーに悩む者がこうした衝動に突き動かされるということは、古代より話題にされてきたものであり、18世紀の医学でも認められていたのだった。ヴェルテルは自殺への衝動を抱くだけでなく、病に由来する自殺が倫理的な弾劾から逃れるとも主張している。

このように、一般に恋愛小説として読まれることの多い『ヴェルテル』には、ヴェルテルのメランコリーが執拗に描かれている。しかも、ゲーテはかなり計算してこれらを描写している。すなわち、彼はヴェルテルの心理の推移をロッテとの恋愛という筋や季節の移り変わりと絡ませながら、きわめて論理的に記しているのである。じっさい、自伝のなかでゲーテは、『ヴェルテル』に関連して、「それ（本物の描写）はただ順序に従って志向や行動を展開したものである」と述べている。それゆえに、『ヴェルテル』は、ブランケンブルクやエンゲルの要請した人間学の詩学を具現化したものと言えよう。

18世紀後半のドイツでおこった人間学は、人間を全体として捉え、それまで軽視されていた感性を視野に入れるものだった。こうした人間学の成果は、作家や批評家たちを魅了し、彼らのあいだに着実に浸透してゆく。学問領域が細分化しつつある時代に成立した人間学は、道徳哲学、医学、心理学などをも含む学際的なものだった。文学者たちはこうした多様な成果を積極的に受け入れながら、自らの理論を構築し、フィクションの世界を築き上げたのである。

(本学准教授 ドイツ文学)

〈キーワード〉啓蒙主義、小説、身体

〔編集委員会付記〕

廣川智貴准教授の他の発表者及び発表題目は次のとおりである。

久多の木造五輪塔

宮崎健司本学教授

「入法界品」における夜天善知識の意義

一色順心本学教授

喪失と悲嘆—悲嘆のはたらきについての考察—

佐賀枝夏文本学教授

以上の発表内容は次号以降の『大谷学報』に論文として掲載予定である。